横浜市立 下末吉小学校　　学校評価報告書　　（ 令和 4 ～ 6 年度 ）

重点取組分野	令和 4 年度 具体的取組	令和 4 年度 自己評価結果	総括
確かな学力	①読書・漢字（熟語）学習・視写に取り組み、語彙力・表現力を高める。②重点研では、ICT機器の活用に取り組み、児童の情報活用能力の育成や思考力・表現力の向上を図る。③教科分担推進により、教科の専門性を生かした授業の実施や少人数・TTによる指導の充実により、児童の学力向上を図る。	朝の読み聞かせが再開され、読書への興味・関心を高める手助けになっている。読書タイムの充実も図っていきたい。漢字の学習は家庭学習も含め継続的に行うことができたが、視写を継続的に行うことは難しかった。ICTについては、学年に応じたまたは、それ以上の活用ができていると感じた。保護者からも、知りたいことや分からないことなどをタブレットで調べることが多くなり、便利に活用していると感じるなどの意見があがった。	B
豊かな心	①たてわり活動では、各学年の役割やめあてを明確にし、自己評価や他者評価によって自尊感情を高め。②学校生活の様々な場面で、褒められる機会や交流の機会を意識的に創出し、より広い視野で認め合う学習を積み重ねて自尊感情を高める。	たてわりを通して、1～6年までの児童が顔見知りになり、上級生が下級生の面倒を見るという自然な流れができていて、これを来年以降も継続していきたい。また、なかよしグループやペア学年を生かした集会をたくさん計画して行ってきたことで、より繋がりが深まったと感じられた。（特に1・6年）来年以降もいろいろな機会でたてわり、ペア学年を活用できるとよい。	B
健やかな体	①休み時間の外遊びについてスタンダードを見直し、ボール遊びや用具遊びなどを充実し、体力を高めるようにする。②学校保健委員会や給食指導を通して、児童・家庭・学校が健康生活への思いを共有し、コロナ禍でも健康な毎日を送る本校のよさを継続する。	全体的に外遊びをしていた子が多かった。ボール遊びができるようになり、ドッジボールなどをする子どもが増えた。そこでも他学年との交流が見られ、体力を高めるだけにとどまらなかったと思う。学校保健委員会では、様々な取り組みをしていたが、長期休業前の活動内容の提示が唐突で十分考える時間が取れなかったので余裕のある活動計画を考えていきたい。	B
70周年記念	本校のよさを「つながり」と捉え、①学年・学級のつながり②全校児童のつながり③地域とのつながり④その他のつながり（SDGsなど）を各テーマにした活動を展開する。	テーマがはっきりとしていたため、活動をイメージしやすかったので、どの学年も繋がりを意識した学習に取り組め、下末吉小学校や地域のよさを知ることができたと感じる。来年度さらに広げていけるとよいと思う。参観した保護者からも、それぞれの学年で工夫された発表を見ることができてよかった、との声を多数いただいた。	A
いじめへの対応	①日常に潜むいじめについて積極的に認知し、子どもの心情に寄り添うことを徹底する。②月1回以上定期的にいじめ防止対策委員会を実施し、認知された案件の経過確認を丁寧に行うことで再発防止に努める。③年2回の児童理解・いじめ防止研修を実施して、全職員のいじめに対するアンテナを高くするとともに、年2回のYPアセスメントと児童アンケートにより些細な変化を見逃さない体制づくりをする。	YPのアンケートをもとに繊細なことでもすぐに対応できていたので、大きな問題は起きなかった。毎月、いじめ防止対策委員会を行い、日常に潜むいじめについて積極的に認知することができた。認知や解消されたいじめ案件について、職員全体がしっかりと共通理解できる機会について考えていくとさらに良い。	B
人材育成・組織運営(働き方)	①低中高各ブロックにブロックリーダーを配置し、常に授業や行事の計画、児童指導関連事項の共有ができる体制をつくり、ブロックでの人材育成を進める。②全学年で実態に応じた教科分担を導入し、学級担任の担当教科（時数）を削減する。また、それにより各職員の教材研究の質を高め、授業改善を進める。	メンター研に関しては、校内の人材を生かしたり、校外（ブロック校）との連携を図ったりしながら行うことができた。チーム学年経営では、チームマネージャーの役割がいまひとつかめていなかったので、反省を来年度に生かしていきたい。教科分担は職員数が少ないのでなかなか難しいが、算数専科を取り入れることができたのは有効だった。低学年に教科分担を取り入れるのはなかなか難しいと感じた。	B
特別支援教育（多文化共生）	①定期的に特別支援委員会を設け、全職員が連携して支援を行い、適切に個別の指導計画・教育支援計画の作成と振り返りを行う。（毎月）②特別支援教室の積極的運用を進め、国際教室対象の児童も含め、特別な配慮が必要な児童への支援のシステム構築を進める。	特別支援を必要とする子どもが多く、運用についてそのやり方を検討していく必要がある。どんな子どもを支援していくとよいかなど教職員で話し合いが必要と感じる。国際教室での子ども達への宿題の量や取り組み方など担任と相談するなど共通理解を図った上で行うとよい。特別支援委員会を毎月効果的に行うということが難しかったので、個別支援計画や教育支援計画をもとにどのように連携していくかなどの計画や活用方法を検討していく。	B
児童指導	①「スタンダード」が現在の社会情勢に合うよう、常に検討・修正をして、子どもにとって分かりやすい内容にする。②職員会議内に児童理解の内容を定例化し、児童の状況を共通理解する。③「Y-Pアセスメント」を活用し、多面的な児童理解と具体的な支援・指導を実践する。④登校が渋りがちの児童へのこまめな連絡や学習の支援の在り方を探りなどについて、関係者が「共有・参画」の意識をもって組織的に対応する。	毎月の職員会議で各学年からの報告を行うことで、児童の様子について職員が共通理解をもって、指導にあたることができた。YPアセスメントを年2回行うことで、学級の子ども達の変化について考える機会を持つのは良いと感じた。年度末反省で学校スタンダードの内容について検討し、内容の改善を図った。	A
読書活動推進	①コロナ禍で実施を見合わせていた保護者ボランティアによる読み聞かせを再開し、またモジュールでの読書活動を実施して、児童の読書活動への興味関心を高める。②学校司書を含む学校図書部が鶴見図書館など外部機関と積極的に連携して情報を提供するなど、単元開発や授業支援で学校図書館の機能を積極的に活用する。	保護者ボランティアによる本の読み聞かせや図書室の環境整備の活動が再開され、子どもたちの読書への興味・関心が高まった。読み聞かせを楽しみにしている子どもも多く、続けていきたい。図書委員会が行ったしおりコンテストは、本への気持ちを高めるよい企画だった。図書館司書教諭が、定期的に各学年の学習に合わせた本を選んで、教室用図書を配付してくれるのがとてもよかった。	A
a15			
ブロック内評価後の気付き	今年度は、6月に小中学校職員による研修を行い、各校での情報端末を活用した教育活動の報告及び研修を行った。また、11月には授業実践報告をかねて小学校において研究授業及び研究討議を行い、研修を深めた。9年間の学びの継続性を持たせるためにも良い機会となった。小6の中学校体験は数年間、中学校PR動画で代替しているが、今年度はオンラインを活用した小学生と中学生の情報交換会を行い、連携を深めることができた。		
学校関係者評価	児童数が少ないので、一人ひとりの個性を理解し、きめ細やかな指導が行きわたっている。算数専科など、職員の専門性や得意分野を生かした指導体制をさらに強化してほしい。少人数のよさは子どもの姿からも感じられる。長い時間をかけて築く密接な人間関係の中で、人一人が受け入れられている安心感があり、学年が上がるにつれ次第に積極的になったり、自主的に行動したりするようになる傾向がある。また、たてわり活動などで、先輩に対する尊敬が自然に育まれ、挨拶や礼儀正しい振る舞いもできることは、本校の伝統として引き継いでほしい。		
中期取組目標振り返り	70周年を契機として設定した「下小70周年　未来に繋ごう下小のバトン！」という中期取組目標が、職員だけでなく、子どもにも浸透し、まさに「下小のバトン＝下小のよさ」を深く見つめ、そのよさを次につなげていくことが今後の目標であることを共通に確認できた1年となった。次年度以降も、小規模校だからこそのきめ細やかな指導と評価、地域行事ややたてわりグループを含む「つながりやかかわり」などの交流活動がもつ教育的価値、全学年単級というコンパクトな集団のフットワークのよさ、など本校の特色を最大限に生かしたダイナミックな教育活動を展開していきたい。		

重点取組分野	令和 5 年度 具体的取組	令和 5 年度 自己評価結果	総括
確かな学力	①読書・漢字（熟語）学習・視写に取り組み、理解力・表現力とともに語彙力の向上を目指す。 ②重点研では、昨年度に引き続きロイロノートを中心としたICT機器の活用に取り組み、学年ごとの系統表を作成していく。 ③算数を中心に教科分担を推進し、教科の専門性を生かした授業の実施や少人数・TTによる指導の充実により、児童の学力向上を図る。		
豊かな心	①たてわり活動では、各学年のめあてや役割を明確にして、キャリアパスポートでの自己評価やあゆみ等での他者評価によって自尊感情を高められるようにする。②たてわり活動を学校の軸として、様々な活動で交流の機会を意図的に設け、感謝したり、されたりする経験ができるようにする。③全校たてわり活動以外にも、教科等で気軽に異学年のペア活動を行える環境を整える。④行事や総合的な学習の時間、各教科等と道徳の時間との関連を図り、豊かな人間性を育む。また、全学級の道徳授業公開を年1回以上実施する。		
健やかな体	①朝縄跳びでは短縄に加えて長縄を取り入れることや、新しいスタンダードに合わせた外遊び（ボール遊び・用具等）を充実させ、集団・個人の両方の面で体を動かす楽しみを体感させていく。②感染症対策では市のマニュアルの変更に合わせ、適宜対応していく。③子ども達を取り巻く環境の変化の中、健康づくりの課題について家庭と学校が共有したり、学校保健委員会の議題としたりしていく。④栄養士・食育部と連携し、年間を通して食育活動を行っていく。		
70周年記念	昨年度、70周年行事の中で培ってきた子ども・保護者・地域のつながりを意識した活動を、今年度も引き続き進めていく。①地域の盆踊り大会や運動会などで下小音頭を踊り継いでいく。②森永工場やあさひ屋などへの町探検を継続して行い、町についての理解を深める。また、昨年度できなかった一歩舎との交流も進める。③幼稚園・保育園や栽培ボランティアさんなど地域の人々との交流も継続していく。		
いじめへの対応	①いじめ防止基本方針を保護者への周知や子どもたちへのSOSの出し方指導を行い、いじめの未然防止や重大化防止に努める。②月1回以上定期的にかつ、いじめの疑いがある段階で直ちに、いじめ防止対策委員会を開いて連携体制を整え、複数職員で対応や経過確認を行って再発防止に努める。③年2回の児童理解・いじめ防止研修を実施して、全職員のいじめに対するアンテナを高くして日常に潜むいじめについて積極的に認知するとともに、年2回実施するYPアセスメントと児童アンケートを複数の職員で確認し、些細な変化を見逃さないようにする。		
人材育成・組織運営(働き方)	①低中高各ブロックにブロックリーダーを設け、ブロック学年研を通して教材研究や行事等の計画、児童指導に関する共通理解を図れるようにする。 ②児童の実態に応じて教科担任制を取り入れ、学級担任の担当教科時数を削減する。 ③メンター研では、校内研修に加え、中学校ブロックのメンターチームと連携し、ワークショップ型の研修を通して、教科指導や児童対応などについて幅広く学べるようにする。		
特別支援教育（多文化共生）	①ブロック研究会や特別支援委員会等で、特別支援が必要な児童について共有する機会を設け、早期発見・早期対応をできるようにする。②個別の指導計画・支援計画を、複数の職員で共有して連携を図ったり、指導や成長の経過をたどれる引継ぎ資料として活用したりできるものにする。③全学年対象とした特別支援教室（ステップアップルーム）の運営の確立を図る。④国際教室・日本語指導等、講師・担当者・担任と家庭で連携を図る。		
児童指導	①「スタンダード」が社会情勢や児童の実態に合うよう定期的に修正を行い、児童が規則の意義を理解して守ることができるようにする。②ブロック研究会や職員会議内で児童理解の時間を確保し、複数の職員で児童指導や支援を行う。③「Y-Pアセスメント」を活用し、多面的な児童理解を図って具体的な支援・指導を実践し、いじめや問題行動等の未然防止を図る。④登校が渋りがちの児童について、SC・SSW等も含めた複数の教職員で児童の状況のアセスメントや、登校に向けた目標や手立ての具体化を行い、連携して支援する。		
読書活動推進	①学校司書や保護者ボランティアによる読み聞かせや、朝の読書活動などを通して、児童の読書への興味関心を高める。②学校図書館から学級への貸し出しを定期的に行い、児童が様々な本に触れる機会を増やす。③学校司書と連携して、授業に関する図書資料を提示し、読書の幅を広げられるようにする。④ICT支援員と連携して、本の挿絵をスライドにして読み聞かせ等に利用し、本への興味関心を高められるようにする。		
a15	b10		
ブロック内評価後の気付き			
学校関係者評価			
中期取組目標振り返り			

重点取組分野	令和 6 年度 具体的取組	令和 6 年度 自己評価結果	総括
確かな学力	c1		
豊かな心	c2		
健やかな体	c3		
70周年記念	c4		
いじめへの対応	c5		
人材育成・組織運営(働き方)	c6		
特別支援教育（多文化共生）	c7		
児童指導	c8		
読書活動推進	c9		
a15	c10		
ブロック内評価後の気付き			
学校関係者評価			
中期取組目標振り返り			